



スペシャリストとしてキャリアアップする道も広がっている！

これからの看護師の 専門性とキャリアデザイン

コロナ禍により、医療現場の最前線で活躍する看護師への注目度は改めて高まってきている。また、中長期的に見ると、地域医療を支える重要な役割を担う看護師へのニーズは増え続けている。このように日々現場の医療を支えるという役割の一方で、認定看護師、専門看護師といった資格制度が整備され、看護師がスペシャリストとしてキャリアアップしていく道筋も整備されてきた。そんな今、看護師としてのキャリアデザイン、それを踏まえた進学先選びで重要になることは何だろうか。

取材・文／伊藤敬太郎

● コロナ禍だからこそ強い使命感を抱き 看護師を志望する高校生も少なくない

日本社会の超高齢化が進行するなかで、より高度な専門性を備えた看護師が数多く求められているという背景があり、ここ30年ほどの間に、大学の看護系学部は飛躍的にその数を増やし続けてきた。図1に示したとおり、看護系学部を擁している大学は1991年度にはわずか11校だったが、2020年度には274校にまで増えている。

このような社会的ニーズの拡大を受け、看護師の志望者も年々増加を続けてきた。ここ数年を見ると、志願者数の大幅な伸びこそ止まったものの、高校生にとって人気の職種であることに変わりはない。コロナ禍によっても今のところ大きな影響は

受けていないと、看護医療系受験総合予備校ena新セミの関口文一氏は現状を語る。

「本校の模擬試験の受験者数はむしろ増えています。看護師を志望する生徒は、子どもの頃から看護師になりたいという気持ちを抱いていることが多く、思いの根っ子が深い。もちろんコロナ禍で医療現場が苛酷な状況に置かれているという報道を見て考え直す層も一部にはいるでしょうが、むしろ、社会貢献することに使命感を抱いて、看護師への思いを強くしている生徒もいます」

看護師志望者が増えてきた背景には、その就職の手堅さもある。前述のように社会的なニーズが確実に増え続けているからだ。ただし、その中身は今、変わりつつあるという。

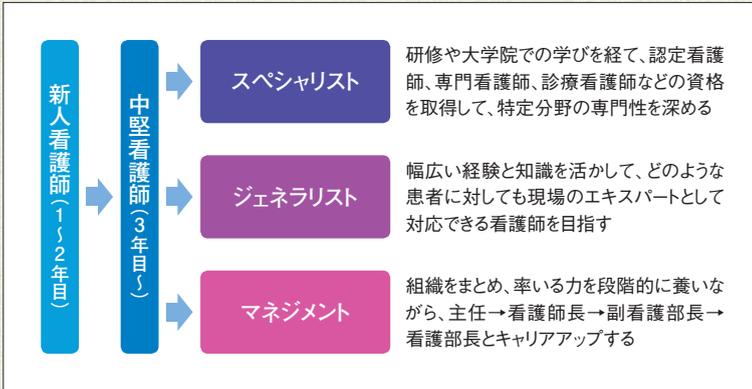
「首都圏の大病院などでの看護師ニーズは一頃に比べると

図1 4年制大学の看護系大学数の推移



出所／文部科学省高等教育局医学教育課調べ

図2 看護師のキャリアイメージ



落ち着いてきました。コロナ禍で離職率が高まっているので、一時的に求人数は増えていますが、あくまで短期的なものだと思います。今はそれよりも地域の在宅医療を支える訪問看護の領域でニーズが高まっています」(関口氏)

大きくスペシャリスト、ジェネラリスト、マネジメントの3つのキャリアがある

ところで、看護師養成施設には大学もあれば、短大、専門学校もある。それぞれどのような違いがあるのだろうか。

「看護師国家試験はいずれの学校を卒業しても受験できますから、それなら学費の安い国公立か専門学校を選ぶという層もいますし、大学・専門学校を問わず国家試験の合格率を重視する層もいます。しかし、看護師養成施設としての基本的カリキュラムは共通していても、学校ごとに教育内容や実習環境には違いがあり、その点にも注目してほしいと本校でもガイダンスしています。例えば、附属病院がある大学や総合病院と連携している大学・専門学校では高度な急性期医療を現場で学ぶことができますし、地方の公立大学・専門学校などでは地域医療を重視した教育に取り組んでいたりします。あるいは、理学療法士などほかのコメディカルを育成する学科が充実し、チーム医療を実践的に学べる医療系総合大学もありますし、助産師や保健師などほかの資格が取得できる大学もあります。よく大学がいいか専門学校がいいかという質問を受けますが、校種の区分よりも個別の学校の教育内容に目を向けてほしいですね」(関口氏)

ただし、教育内容で学校を選ぶとなると、高校生の段階で、「将来どのような看護師になりたいか」をある程度明確しておく必要がある。しかし、看護師志望者は

「看護師になる」ことがゴールになってしまいがちで、その先のキャリアを描いているケースはまだ多くない。そう指摘するのは看護師へのキャリアカウンセリングなどに携わるNPO法人看護職キャリアサポート代表の濱田安岐子氏だ。

「看護師の養成においては看護の知識・技術・姿勢を身につけるための専門職教育が中心であるため、キャリアデザインという考え方は以前はあまり重視されていませんでした。また、看護師となって現場に入ると、目の前の患者さんのケアが最優先となり、なかなか将来のキャリアについて

じっくり考える機会がない。もともとその習慣もないですから。そのため、学生の段階でどのような看護師になりたいかを考え、自分の軸をつくっておくことが実は大切なんです」

看護師のキャリアは図2に示したように、スペシャリスト、ジェネラリスト、マネジメントの3つに大別できる。この先には、例えば、教育研究、国際看護師といった選択肢もある。これに加えて、総合病院で働くのか、地域の専門クリニックで働くのか、在宅医療を支える訪問看護師として働くのかといった働く場に関する選択肢もある。それらを総合して自分なりのなりたい看護師像をある程度具体的に描いておくことがポイントだ。ただし、情報とイメージだけで将来像を思い描くことにはリスクもあると濱田氏は言う。

「看護師は人の生死に関わる仕事ですし、コロナ禍に象徴されるように苛酷な環境に置かれることもあります。そこで使命感をもって働き続けるためには、『自分を見つめる』というプロセスが非常に大切になります。自分がどう生きたいのかということと

図3 認定看護師のなり方と認定看護分野

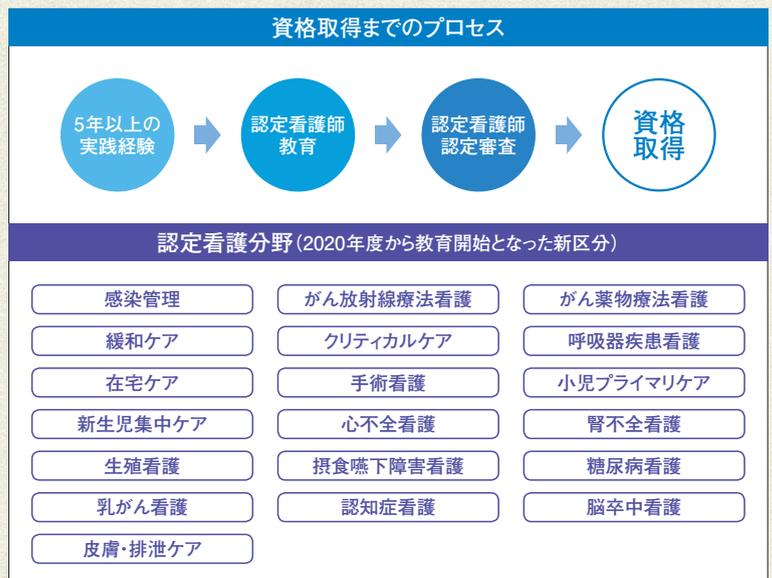
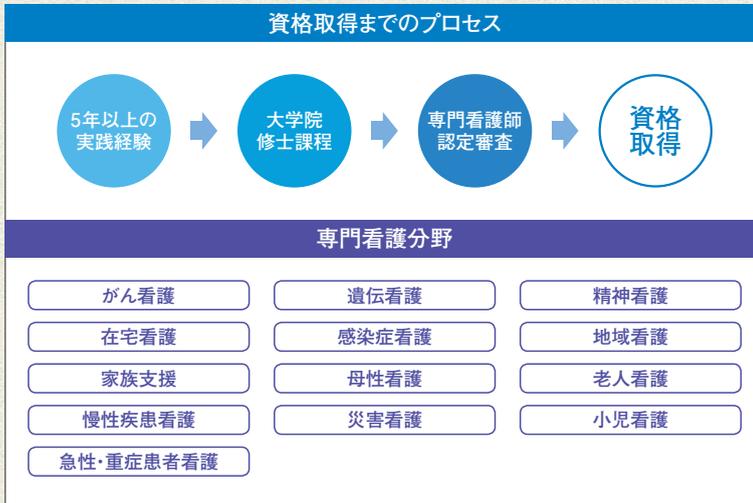


図4 専門看護師のなり方と専門看護分野

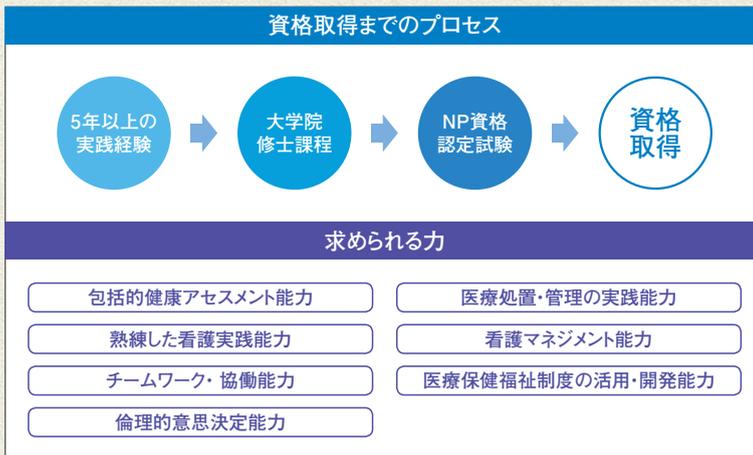


このうち、現場を知らない高校生にとって最もイメージしづらいのはこのスペシャリストではないだろうか。

近年は看護師に求められる専門性も高度化しつつある。感染管理、がん放射線療法看護、緩和ケア、手術看護、新生児集中ケア、脳卒中看護、などの細分化された分野に関して高い専門知識や技術をもち、現場の問題解決や指導的役割を担う認定看護師(図3)、がん看護、在宅看護、急性・重傷者看護、遺伝看護、感染症看護、災害看護、地域看護、小児看護などの特定の分野に関して大学院修士課程で学んで専門性を深めた専門看護師(図4)、同じく大学院修士課程で学び、医師に代わって一定レベルの診療行為を行うスキルを身につけた診療看護師(ナースプラクティショナー：NP)(図5)といった専門資格を有する看護師へのニーズも伸びている。5年以上の実践経験を積んでこれらの資格を取得すれば高度な専門性が求められる現場でリーダーシップが発揮でき、給与面で優遇されることもあって注目されるキャリアパスだ。

「また、マネジメントを目標とするなら、常に組織全体を見ながら、医療制度のなかで自分たちがどのように動くべきかを意識し、目の前の患者さんの幸福と同時に、社会全体の幸福、チームメンバーである看護師たちの幸福も考えることが大切です。組織

図5 診療看護師(NP)のなり方と求められる力



での最適解を追求することも、現場の仕事とは違ったやりがいがあります」(濱田氏)

● 自分が目指す看護師像に合った 実習環境、教育内容の学校を選びたい

もちろん、高校生の段階で先々のキャリアをすべて決める必要はない、現場で経験を重ねるなかで方向性が変わってくることもあるだろう。しかし、例えば「総合病院でスペシャリストとして最先端医療に関わっていきたい」「地域の高齢者の健康や日々の暮らしを支える仕事をしたい」という自分なりの原体験や思いに基づいたキャリアビジョンがあれば、それに適した実習環境やカリキュラムがある学校を選ぶことができる。キャリアデザインや看護管理学といった教育の充実度もチェックポイントになるだろう。知名度や偏差値、国家試験合格率以外に、教育内容・教育環境をしっかりと見極める視点をもって学校選びができれば、学生時代に「看護師になること」の先を見据えて成長することができるはずだ。

看護師としてのキャリアを結びつけて考えることが求められるんですね。もう一つ、多くの看護師と話をしていると感じることは原体験の大切さです。例えば、高校時代のボランティアや看護体験、大学時代の実習などで患者さんと直接関わるなかで使命感やこうなりたいという思いを抱いた経験は、看護師としての原体験となり、現場で辛くなったときに立ち返る支えになるもの。看護師を目指す人たちには体験を通してキャリアを考えることを意識してほしいと思います」

看護師として現場で経験から学びつつ、患者に寄り添う気持ちやそのための専門性を養っていくことはすべての看護師に求められることだ。そのうえで、先に挙げたキャリアの選択肢がある。現場での多様な経験、さまざまな研修を重ねながら専門性の幅を広げていけばジェネラリストへの道が拓け、組織内で主任、看護師長、看護部長へとステップアップを目指せば組織を動かすリーダー、マネージャーとしてのキャリアが拓ける。また、特定の看護分野の専門性をより深めていくことによってスペシャリストを目指す選択肢もある。